小学校の『毛筆書写』指導に関する一考察

平嶋　一臣

A study on “Brush-Writing” instruction in Elementary Schools.

by
Kazuomi Hirashima

はじめに

平成 23 年度、わが国の小学校教科書は、新学習指導要領下、新しい編集意図のもと、質・量ともにさまざまな改訂が行われ注目をあびた。

それというのも、学校で使用する教科書は、政府・文科省の方針を受け、一定の基準に沿い、各教科書会社により編纂されたものであるからだ。では、このような手順を踏んで作成されていくそれぞれの教科書編纂の意図は、どのような形で、現場の教師や児童に届こうとしているのだろうか。また、これらの教科書を使用して行われる教師の具体的な指導方法、指導内容は、実際の教育現場ではどのように生かされているのだろうか。

周知のように、教科書は、児童生徒たちにとって、何よりも身近な学習（媒体）教材である。それだけに、各教科書会社が意図している単元学習の目標はあっても、それが何らかの事由により、児童生徒に届きにくい内容、あるいは届いていない実態があれば、不安は隠せない。

小学校児童が新しい教科書を手にしてすでに２年目に入った。ここでは各社の発行した教科書に視点を当て、教育現場の悩みを吸い上げつつ、解決できる身近なところから論じてみたい。

1　本研究の目的

本論では、教科書の編纂内容と現場の教師及び児童との意識のずれや、実態にそぐわない教科書編纂の箇所があれば、その部分を指摘しながら、今後のより良き学習方法及び発展的な学習内容を探ることを目的としている。

とはいえ、限られた紙面で、全ての教科について論じ指摘することも不可能である。そこで、本論では、小学校国語、その中でも、『毛筆書写』(1)（以後、特別な場面を除いては、『書写』と呼ぶ）の教科書編纂内容及びその教科書を使っての指導について、問題点を指摘しながら論じていく(2)(3)。

また、これらの目的を第一義に持つ性格上、上記のように意識のずれが生じていること

受理日　平成 24 年 11 月 30 日
純真短期大学こども学科　特任教授

を指摘できたとしても、その責めは、単に一者のみに在るというわけではない。修正する部分があれば、文科省・教科書会社(4)・学校現場の教師たち三者が一体となって、その解決にあたらなければならない。

書写学習の目標分析に入る前に、書写を大枠で包んでいる新学習指導要領国語編の主たる改訂内容を見ることにする。

まず国語・社会・算数・理科・体育の５教科に関しては、その指導内容に加え、年間授業時間数も増加がみられた。その中の「国語科」については、次の三つの基本的指針が挙げられている。

①付けたい力の明確化
②言語活動の充実
③学習評価の改善

つまり、これらの基本を踏まえつつ、国語科全体として、「取得したことを活用できる力」「特に書く力を身につけることを重視する」という基本的な方針が、明確に打ち出されたわけである。

では次に、それを受けて国語科の中の「書写」指導に関して新学習指導要領では、どのような部分に変更があったのかを見ることにする（次に挙げた新指導要領中、アンダーラインの部分が、今回の主な変更部分）。

〔第３学年及び第４学年〕

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

（１）略

（２）書写に関する次の事項について指導する。

ア　文字の組み立て方を理解し、形を整えて書くこと。

イ　漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書くこと。

ウ　点画の種類を理解するとともに、毛筆を使用して筆圧などに注意して書くこと。

〔第５学年及び第６学年〕

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

（１）略

（２）書写に関する次の事項について指導する。

ア　用紙全体との関係に注意し、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと。

イ　目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと。

ウ　毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと。

この 10 行ほどに収まっているのが、新学習指導要領中の『書写』に関する部分である。

つまり、この部分に今回の指導要領改訂の意図が在る。さらに詳しく読んでみると、今回の国語科全体に関する改訂の骨子である、「取得したことを活用できる力」「書く力を身につける」との関連がうかがえる。

しかし、目標がこれまで以上に高次な段階を求められているにもかかわらず、現場での『書写』総授業数は、何ら変わっていない。３年生からスタートする「毛筆書写」の指導

時間は、年間およそ 30 時間を目安とするよう、指導要領・解説編にその基準が示されている。また、そのことと結果的に関連しているのか、最近の若年教師の抱える「毛筆書写特殊技能論」も気になる。なぜなら、このような場合一般的な対策として、教師に対する校内外における「研修」を行う方法が考えられるのだが、それが持たれたという報告は、私の知る限りではない(5)。

では、毛筆書写の授業は、年間約 30 時間計画されながらも、具体的な指導方法について悩み、研修の機会を待っている極めて真面目な教師たちは、どのような方法で、そのスキルアップを図ればよいのであろうか。

筆者は、４年前、定年退職で学校現場を離れたが、現職の頃から、教師の多くが書写指導にかかわる施設面等の不備について、様々な悩みを持っているということに気付かされていた。加えて、今回インタビューに応じていただいた学校管理職及び教諭の多くは、異口同音のように「書写の授業は、ほとんど（の教師）が、我流でやってます」との言葉も気になる。「我流」、それも教師の個性の一つであろう。したがって、それも完全に否定はしない。しかし、そうは言ってもどこかに一抹の不安が残る。

教育は子どもたちの成長と同じで、連続する時間的な流れの中にある。したがって、毎年変わる担任教師の懐の中にある児童にとっては、個性のみで脈絡のないままの指導では、戸惑いこそ募り混乱を生むだけである。

これからは、児童の教育に直接携わる教師たちが、書写に関する悩みを少しでも具体的に解消していくことにより、その「我流」を少しずつそぎ落とし、より質の高い書写授業を目指していくべきではなかろうか。

それにはまず、書写指導を行う教師が、書写の授業そのものをどう受けとめ、どのような姿勢で臨もうとしているのかについて考察を行う必要がある。あわせて、児童にとって書写学習はどう映っているのか、その意識を率直に述べてもらい、教師間との意識のズレの有無を調査したいと考えた。

２　調査項目及び方法

アンケート項目は、以下の通りである。教師対象に８項、児童対象に４項とした(6)。

（１）教師対象

①これからのコンピューター万能の時代、「毛筆書写」の必要性を、どのように考えているか。必要・不必要及びその理由
②そもそも「書写」指導は、好きか嫌いか。及びその理由
③「書写」の授業（45 分間）で、児童の行う道具の準備と片付けの時間の取り方
④「書写」の授業で困っていること
⑤左利き児童への指導をどう行っているか
⑥「書写」の授業について、独自に工夫していること
⑦「書写」の授業についての改善を要求したい部分
⑧これまでに「書写」授業での、保護者からのクレームについて

（２）児童（３～６年生）対象

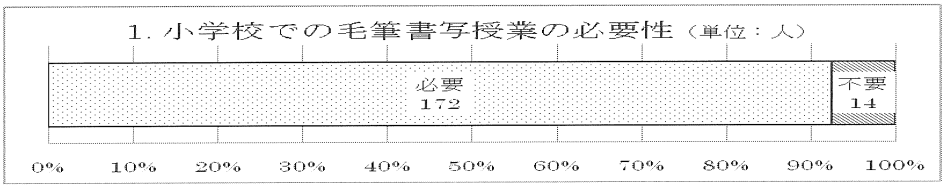
①「書写」の勉強は好きか嫌いか。及びその理由
②「書写」の勉強で困っていること
③「書写」の勉強について、先生や学校に対してお願いしたいこと
④学校以外に、「書写」の塾に通っているか

対象校は、福岡市内の周辺部、中間部、中心部に位置する小学校 16 校とし、教師 186 名及び３～６年生児童 2756 名に協力を願った。調査期間は、2012 年 9 月 15 日より 9 月 30 日である。

3　調査結果と考察

A、教師対象のアンケートの結果と考察

（1）毛筆書写授業の必要性



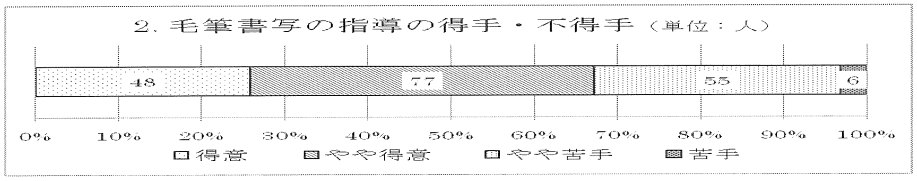
約 92%の教師が、その必要性を認めている。その理由は一体どこにあるのだろうか。これについては、アンケートに続く自由記述「必要な理由」に書かれたことが、一つの示唆を与えてくれる。その中から代表的なものを次に挙げる。

・情操教育につながる　・静かに落ち着いて書く時間を持つことができる
・精神が統一できる　・パソコンの文字が多いからこそ、手書き、特に毛筆の良さ温かさを感じる　・個性の感じられる文字が好き　・文字が伝達のためだけでなく、芸術としても存在していると思う　・文字指導以上のことが伝えられるから

これらの理由を見ても、現場の教師たちは小学校の書写の教育目標を、児童に精神的な資質の向上、あるいは芸術的な表現を求めていることが分かる。それは価値のあることだが、はたして新学習指導要領はそのような高次元の学習を、小学校での書写学習に求めているのだろうか。これは、先に述べた３年生から６年生までの書写に関する指導要領の方針のどこにも合致していない。したがって、児童の書写学習に期待する教師の気持や期待は理解できないでもないが、これを主たる目標とする必要はないのである。このことについては、福岡教育大学・和田圭壮が、小中学校教師に「書写」と「書道」の理解不足が見られる、との文言で既に指摘している(7)。

ここにも、我々は指導の基本的ねらいと現場教師との意識のズレを認めざるを得ないのである。

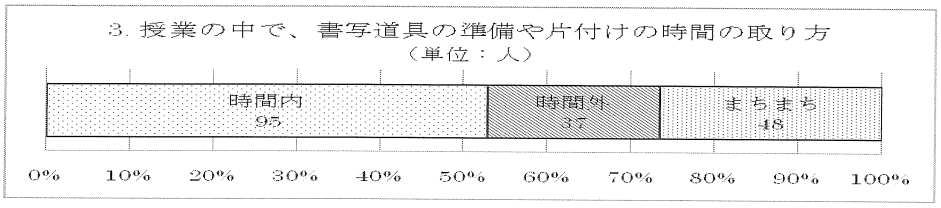
（2）書写指導の得手・不得手



「得意」「やや得意」を合わせると、およそ 67%である。ということは、3 分の 1 に

近い教師が、苦手意識を持ちながら、書写の授業に臨んでいることになる。その理由の多くは、自分自身毛筆書写が苦手、授業の準備やあと片付け、墨こぼしを考えると意欲が湧かないという理由であった。書写（指導）が、特殊な技能を要する教科だと考えている教師が多いことが、今回のアンケート調査や数名の教師へのインタビューからも分かってきた。またこれらの教師とアンケート（１）の中の書写授業不要論の 7.5%の教師との相関には、高いものがみられたことも付記しておきたい。いずれにしても、何らかの方法を講じ、この苦手意識の高さについて、早急な対策が望まれる。

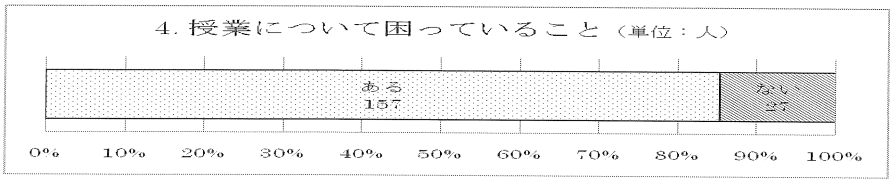
（３）書写の授業における、諸道具の準備や片付けの時間の取り方（１名記入漏れ）



45 分間の時間内に、準備も片付けも含めて授業に臨んでいる教師は、およそ 52%であった。これは児童にとって、休み時間の確保という点で望ましいことではあるが、実際には、十分な指導ができないまま終了することが多いという教師の呟きも聞かれた。そこで教師の中には、書写にかぎり２時間続きにして 90 分の授業を組んでいるという教師も少なくなかった。これはゆったり落ち着いて授業が進められていくというメリットが考えられるが、半面、書写学習の間隔が空いてしまい、前時の学習とのつながりや、書写技能の定着化の難しさというデメリットも聞かれた。

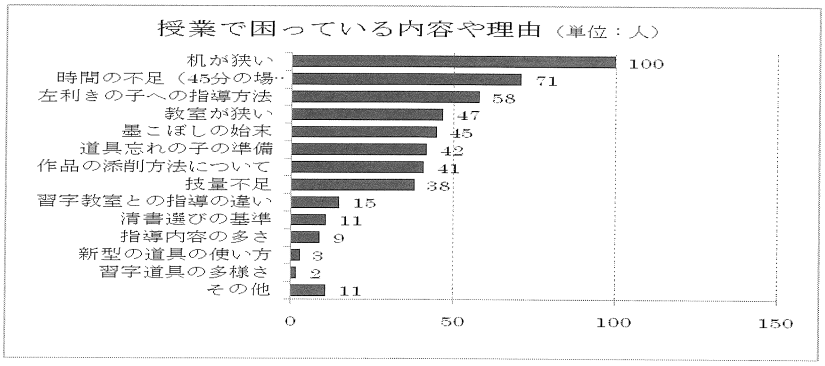
いずれにしても、教育現場では、指導要領の目標や教科書中に示されているスムーズな学びの流れには程遠いものが在る。

（４）書写の授業に関して困っていること（２名記入漏れ）



約 85%の教師が、書写の授業で何らかの問題を抱えている。これは、かなり深刻な状態と考えてよいだろう。その具体的な理由を、多いものから順に並べると次のようになる。

（５）授業で困っている内容や理由（のべ人数）



このグラフから、現場の教師たちは、45分（まれには90分授業）の書写授業の中で、かなり多岐にわたる心配や悩みを抱えていることが分かる。その中の上位3項は次のようであった。

①机の狭さ（約54%） ②授業時間が短い（約38%） ③左利き児童への指導（約31%）

ここではこれらの3点にしぼり、若干の考察を試みる。

まず「机の狭さ」についてだが、授業で児童が実際に使用する書写用具の平均的な寸法は、それぞれ、道具ケース13㎝、下敷き26㎝、教科書19㎝であった。となると、現在小学校で使われている一般的な児童用机の横幅58㎝と同寸法となり、そこには少しのゆとりもないことが分かる。これでは教師は、指導中ハラハラのしどおしではなかろうか。書写の学習をするには、普通教室・普通学習机では無理なのである。教師のみならず児童からも、「もっと広い場所で、大きい机で」との要望が、かなり以前から出てきている理由もそこにある。

次に授業時間の短さがある。これは、先の（3）の項でも述べたが、授業内容（本時教育目標）の充実に主眼を置くのか、児童の学校生活リズムに主眼を置くのかで、教師の書写指導のスタンスも微妙に変わってくる。

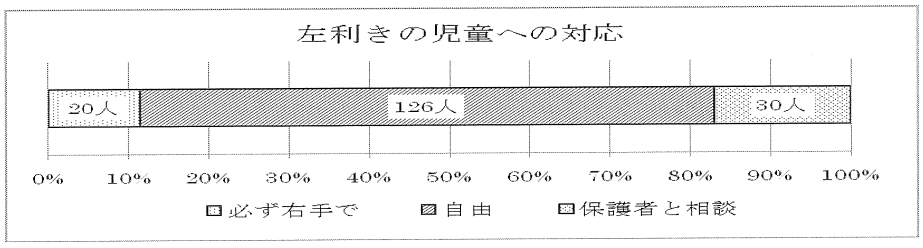
①習字道具の準備や片付けは、45分とは分けて取らないと、時間内の学習内容の多さについて行けない

②習字道具の準備や片付けもまた、授業の一環なのだから 45 分の中に入れるべきだ。加えて、児童の休み時間はきちんと保障されなければならない

この真反対の両者の考えは、いずれも説得力がある。それだけに、結果的に書写の授業時間の取り方は、実際にはかなりのばらつきがある。

3つめの、左利き児童への指導については、次の項でさらに詳しく論じてみたい。

（6）左利きの児童（の筆の持たせ方）に、教師はどのように考えて指導を行っているか



（10名記入なし）

これをみると、約 11%の教師が強制的に右に筆を持たせ書かせている。また、（右手左手にとらわれず）自由にさせている教師が、約71%と最も多い。そして、約18%の教師が、児童の精神的な負担も考慮してのことであろう、本人の意志に、保護者の意見（願い）も受け、筆を持つ手を決めている。もちろんこれらの取組には、どれが正しいといったような、短絡的な結論を出すのは難しい。ここにも漢字・ひらがなを書くという、日本という国の持つ独特の文字学習の世界があり、さらにそれをブラシの中でも特殊な部類に入る、書写用毛筆で書くという授業の難しさがある。

①強制的に筆を右手に持たされ、書写授業を受けている児童の毎時間の心境は如何なものであろう

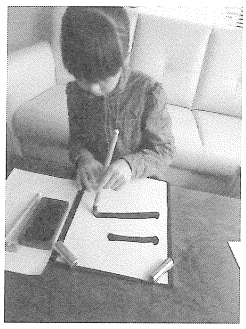
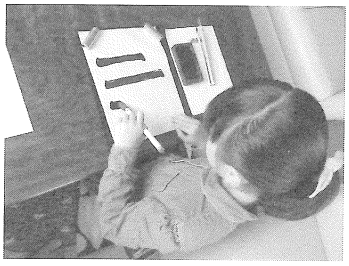
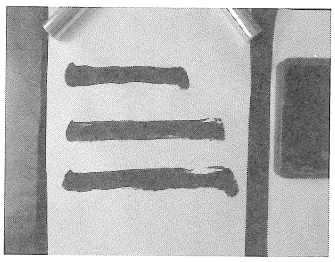
②自由。一見理想のようだが、書写授業での漢字・ひらがな学習に付きまとう、横画の

右上がり、打ち込みの斜め左45度は、児童にとってかなり厳しいものがあろう。

③親に相談。本人の納得が、すんなりと受け入れられればよいのだが・・・

このように、利き手と書写授業（学習）の関係は、単純なものではない。ややもすると、大人たちはこのことを些細なことのように考えてしまいがちだが、その子にとって書写学習のみならず、国語科ひいては学習全般に意欲低下をもたらす怖れがある。教科書作成各社も、左利きの児童への配慮は、６社中わずか１社、それも用具の配置についてのみである[8]。ちなみに、今回筆者のアンケート調査に応えてくれた186名の教師の中で、学級での左利きの人数をたずねたが、その割合は、6.8%であった。平均すると、40人学級では、３名弱左利きの児童がいることになる。

また、上記②について、より具体的に示すために、次の写真を掲載する。

※ 左手で筆を持つと、写真のように筆管が逆に傾き、突く線で書くことになる。また、起筆（打ち込み）が、左斜め45度は、基本的に難しい

（７）教師個人で工夫した書写授業法（多い順に）

これについての回答は、下記の通りであった。

①90分（または60分）授業を行い、ゆとりを持って指導する・・・・・・・・・13名
②その時間の学習ポイントを決めて指導する・・・・・・・・・・・・・・・・９名
③練習と清書の時間を区切って指導する・・・・・・・・・・・・・・・・・・６名
③まず手本のコピーをなぞり書きさせて、形を覚えさせる・・・・・・・・・・６名
⑤手本を拡大コピーして、黒板の中央に貼って、まず説明している・・・・・・５名
⑥その日は、筆洗いを宿題に代える・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４名
⑦ペットボトルの中の水で、授業の終了後、筆を洗いケースに収めさせる・・・・３名
（ただし、これについては、新しくなった教科書は、数社が写真入りで説明がある。「教師個人の工夫」に該当しないと考え、ここには書かなかった教師も多かったかと思う。筆を学校で洗えない場合も多く、現在はこのような方法も考案されている）
⑧デジタル教材を使っている・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２名
⑧教科書の課題とは別に、季節の言葉など自由題で書かせることもある・・・・２名
⑧名前の書き方指導は、別枠の時間を取って行っている・・・・・・・・・・・２名
⑧出来上がった清書には、朱墨で添削をせず、自分の感想を書かせている・・・・２名
⑧墨を摺らせている・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２名

そのほか、38名が1件ずつ独自の工夫を行っていた。これは、書写の授業には、工夫やアイデアを生かす余地が、まだ十分に残っているということでもある。

（８）書写指導に関する要望（多い順に）

①書写の専科教員配置[9]・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39名
②書写専用教室（水道付き）・・・・・・・・・・・・・・・・・30名
③児童の机を大きくしてほしい ・・・・・・・・・・・・・・10名
④書写の実技研修会を開いてほしい・・・・・・・・・・・・・６名
⑤書写の補助教員・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５名
⑥和室で正座して書かせたい・・・・・・・・・・・・・・・・３名
⑥手本の通りではない字も「良し」としたい・・・・・・・・・３名
⑧DVD等の教材で、筆の動きを学ばせたい・・・・・・・・・・１名
⑧年間の授業を30時間から6時間に減らしてほしい ・・・・１名
⑧習字道具を学校で準備する・・・・・・・・・・・・・・・・１名

のべ人数ではあるが、およそ半数に近い教師がなんらかの要望を持っていることが分かる。現状のどこに、指導上不十分なものを感じているかを想像する一つの資料になると考える。またこの中には、先の（５）の中のアンケートとの重なりを避けて控えめに書いているのもあることが想像できる。したがって、その結果とも並行して、教師の要望を推し量らなければならない。

もちろん、この要望の中身をそのまま受け入れることが、即授業改善につながるものでもなかろう。今回のアンケート結果によるこれらの要望の背景がどこにあるのか、なぜそう考えるのかといった、さらなる質的調査を待たなければ、軽々に断定はできないものも多い。

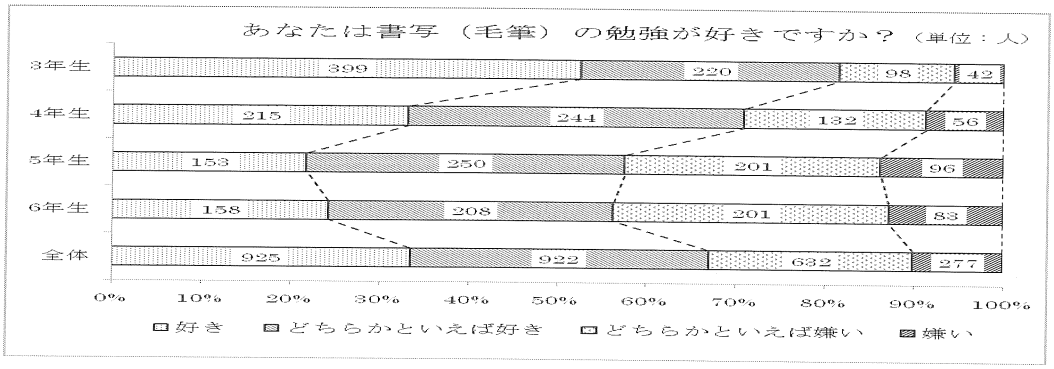
（９）書写指導についての保護者からのクレーム（多い順に）

①授業中に、クラスの子から服に墨を付けられて帰ってきた・・・・・・・・・・・11名
②筆を学校で洗わせてほしい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７名
③なぜ無理に右手で書かせるのか。利き手（左手）でいいではないか・・・・・・３名
④筆は洗わないがいい、と昔は先生から教わってきたが、今では自宅で洗ってきなさいと指導してある。どちらが正しい？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２名
④学校で使った半紙は、学校で始末をしてほしい・・・・・・・・・・・・・・・・２名
⑥先生の添削と注意書き（朱墨でのコメント）で、子どもが泣いて帰ってきた・・１名
⑥先生なら、朱墨できちんと添削をしてほしい・・・・・・・・・・・・・・・・・１名
⑥「先生は、私の書道教室に入門すべきです」（保護者が書道塾の先生）・・・・・１名
⑥お手本のなぞり書きを、させないでほしい・・・・・・・・・・・・・・・・・・１名

以上、のべ29人の教師が、クレームを受けている。この中には、保護者の一面的なものの見方で、教師に迫ってきた意見もあるが、中には事前に教師と保護者間で、意思の疎通を図っておけば、これらのクレームは起こらなかったものもある。ここにも、書写の授業の抱える、特殊な事情が見えてくる。

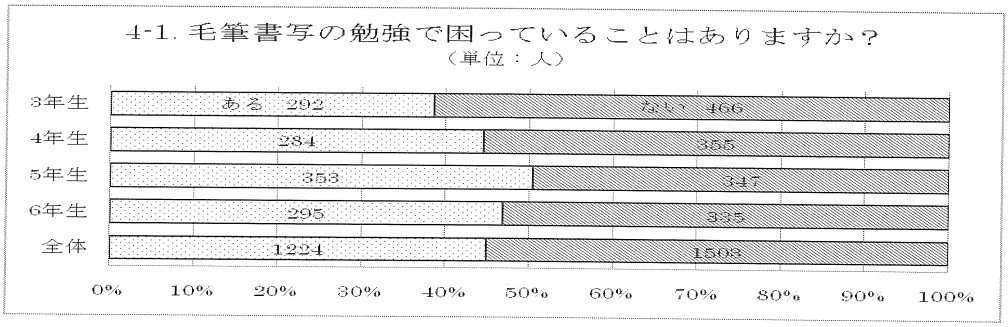
B，児童対象のアンケート結果と考察

（１）「書写」の勉強は、好きか嫌いか。及びその理由

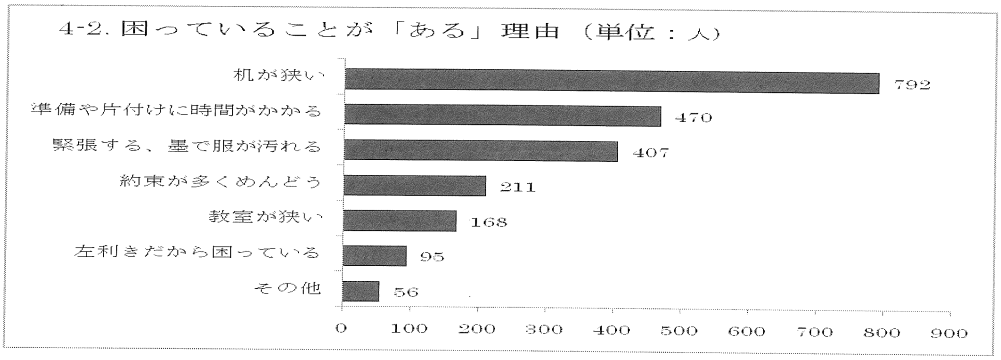


毛筆書写がスタートする３年生にとって、新鮮な気持ちや期待感もあるからだろう、約82%の児童が興味を持ち、この授業に取り組んでいる。それがやがて上級生に進むにつれて、少しずつ興味も薄れてきているようである。次の質問結果との関連もあるが、書写の学習について困っている児童の割合が、上級生になるにつれて増加していることとの関連も考えられる。このことについては、さらに細かく質的調査と分析が必要である。いずれにしても、５年生を境に書写嫌いが増加していることは、学校現場のあり方に一つの問題点を提示していると考えてよい。

（２）「書写」の勉強で、困っていること



毛筆書写がスタートする３年生では、その発達段階からして、新しい学習に向かう喜びと期待も大きく、自ら課題や疑問を外に向かって提示することも少ないのか、困ったことを抱えている児童も40%を切っている。しかしこのグラフの示すとおり、上級生に向かうにつれ、約50%の児童が、何らかの困ったことを抱え始めている。これらの児童にとって、困ったこと（悩み）とは何だろうか。その理由についてさらに詳しくアンケートを取ったところ、次のような項目が挙がってきた。



学習机の狭さについては、教師の悩みでもトップであった。先にも述べたとおり、昨今の標準タイプの習字道具は、現在使っている標準タイプの学習机には、安心して入る（乗

る）寸法ではない。どの児童も、筆・硯（ケース）・半紙（下敷き）・手本（教科書）を机の幅ぎりぎりのところまで置いて、不安を抱えながら書写学習に臨んでいる。つまり、児童には授業内容に入る以前から、すでにかなりの精神的な負担を強いられていることになる。このことは、168名の児童から出ている、「教室が狭い」との関連もあるが、児童の学習机の寸法には、少なくとも、書写学習においては不適といわねばならない。

児童が落ち着いて学習に臨むためにも、教育委員会・文科省には、何らかの手立てをお願いしたい。私としては、現状では都市部など、人口のドーナツ化現象による児童数減で空き教室があれば､そこに水回りを完備した書写専用の教室にしてはどうかと考えている。

（３）「書写」の勉強について、先生や学校に対する願い（多い順に）

（自由記述方式なので、前項の「困っていること」と、類似したことも挙がっている。それらは、児童にとってさらに強い願いであり、ここでも再度文章として書きたかったものと考えられる。したがって、類似項目ではあっても前項のグラフ内の総数とは異なっている）。

①　教室や机など、学校設備について

・机を広く（大きく）してほしい・・・・・・・・・・・・・・・78名
・教室を広くしてほしい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31名
・学校に習字道具を（ずっと）置かせてほしい・・・・・・・・８名
・筆を学校で洗いたい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４名

②　先生に対して

・時間が短いので、長くしてほしい・・・・・・・・・・・・・23名
・もっとポイントを押さえて教えてほしい・・・・・・・・・・８名
・もっと優しく教えてほしい・・・・・・・・・・・・・・・・８名
・もっと厳しく（ランキングを付けたりして）教えてほしい・４名
・塾の先生と教え方が違う・・・・・・・・・・・・・・・・・１名
・墨を摺らせてほしい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１名
・名前の書き方も教えてほしい・・・・・・・・・・・・・・・１名
・先生も字が上手になってほしい・・・・・・・・・・・・・・１名
・みんなの作品を、すぐに紹介してほしい・・・・・・・・・・１名

③　教科書（手本）について

・小さくしてほしい（机が狭いから）・・・・・・・・・・・・７名
・教科書の字は細すぎる・・・・・・・・・・・・・・・・・・４名
・もっと自由に書きたい・・・・・・・・・・・・・・・・・・４名
・もっと難しい字を書きたい・・・・・・・・・・・・・・・・３名
・もっと簡単な字を書きたい・・・・・・・・・・・・・・・・３名
・お手本の中に、中心線や書き順を入れてほしい・・・・・・・３名

④　書写用具（習字道具）について

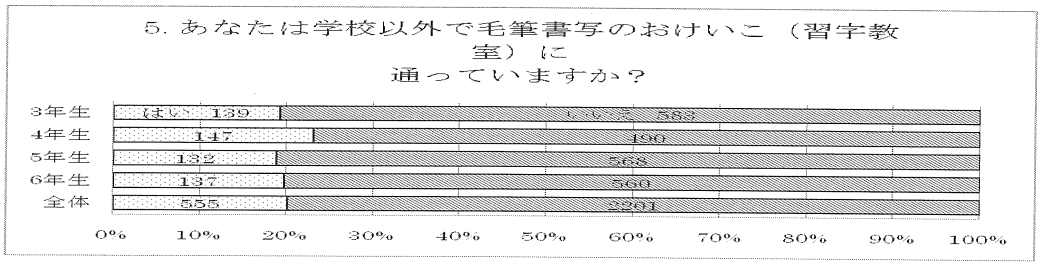
・道具をもっと軽くしてほしい・・・・・・・・・・・・・・・１名
・半紙を厚くしてほしい・・・・・・・・・・・・・・・・・・１名

⑤　その他

・書写の時間を無くしてほしい・・・・・・・・・・・・・・・・５名

児童の書写学習に対する要望を、便宜上ここでは５つの分野にまとめてみた。それぞれの要望は、これらの児童にとって何らかの理由での強い思いが込められているはずである。その要望・願いの背景にあるものは何であろうか。今後さらにそれらの質的調査を行う必要がある。

（４）学校以外に、「書写」の塾に通っているか



平均すると、約 20%の児童が、習字教室（書道塾）に通っている。学校間比較では、福岡市の周辺部のほうが、中心部より教室に通う割合が、やや高い傾向がみられた。中心部の児童は、他の教室や塾などの稽古事が多種にわたっていることとも関連があるものと考える。

私見ではあるが学校書写と、学校以外の習字教室・書道塾との指導方針及び内容には、かなりのひらき（差）があるようだ。これらの教室や塾では、「書写」的な技よりも「書道」的な精神性や芸術面での指導に重点を置いているところも少なくない。この違いを小学校で書写を指導する教師はしっかりと認識しておかないと、書写学習本来の目標から離れていく心配がある。

おわりに

以上、福岡市の小学校教師及び児童を対象に行ったアンケートにより、書写学習の現状と課題について、若干の考察を試みた。

これらの結果から、次のことを確認するとともに、今後の書写指導（児童の立場からは「書写学習」）の在り方について、その改善を展望しつつ本論の結びとする。

（１）書写学習は、学習内容・学習形態・学習用具からして、他教科とかなり違った内容を含んでいる

（２）書写指導には特殊な技能が必要と考え、教師の一部には、授業そのものが苦手という者も少なくない

（３）書写授業は、現行の 45 分×30 回で、はたして十分にその目標を達成できるのか、不安が残る

（４）書写授業を行う施設面での条件整備が不十分であり、そのしわ寄せは、教師個々人の工夫や努力によって支えられている部分も少なくない

（５）左利き児童への対処の仕方が不十分なままである。かつての時代とは異なり、現在では右利きに無理にしよう、させようという時代でもない。それだけに、今後も左手で文字を書く子どもは増えるであろう。そうであれば、小学校入学後の児童にと

って、文字を書くこと、中でも毛筆を使って文字を書くことは、かなりのハンデまたは苦痛を伴うはずである。ましてや、左手では、教科書の手本のような形には本来出来うるはずがないのである。そのことについて、教師をはじめ保護者も教科書会社も文科省もしっかりと理解を示し、今後の指導の幅を示す必要があろう。残念ながら左利き児童への指導や対応は、どう行えばよいのかについて、何も示されていない。用具の使い方、筆を持つ角度、筆運び等々、対象となる児童との共通理解の上に立ち、書写学習に、より興味をもつように導いていく必要が迫られている。

（6）書写と書道の違いを再確認し、小学校教師は少なくとも書道的な考えを抑え、「書技」的なものと捉えるべきであろう。私は「書写」という曖昧な意味合いを持つ言葉より、むしろこの「書技」の呼称を提唱したい。その方が、小中学校での新学習指導要領が、目標としている主旨に添うものと考える[10]。

註

（1）ここであえて文科省・教科書会社・現場教師と三者の捉え方を行ったのは、教科書という教育媒体（教材）を中心とする学習場面から外れて論じることは、まず不可能であるからだ。今現実に、教科書というナマの資料が教材として児童に提示されれば、それを作った会社、それを教科書として認めた文科省・それを使って授業に組み立てようとする教師たちは、おのずから学校現場で学級の児童への教育に責任を持つ立場にあるという観点に基づいている。

（2）児童は、一般的に、毛筆書写のことを、単に『習字』と呼ぶことが多いようである。またこの場合は、硬筆書写の意味を含んでいないことが多い。長い慣習がそう呼ばせてきたのだろう。現在、書写の教科書を作っている６社は、いずれもその表紙タイトルに『書写』を使い、それに冠する言葉を付けていくらかの編集の意図が感じられるものもある。しかしここでは、その煩雑さを避けるため、文科省の学習指導要領国語編に示されるところの『書写』で統一した。もとより、児童の中には、『書道』という言葉も聞かれるのだが、これは私塾の流れとの関係で使っているのであろう。小中学校の現状では、芸術書道の領域をその学校教育の内容を含んでいないので、ここでは使わない。

（3）文科省における、各大学の小学校教諭免許取得に関する書写実技コマ数に、明確な規定はなく、『国語』の授業の中で、「書写を含むものとする」とあるだけである。福岡都市圏の小学校教諭免許取得課程のある各大学に問い合わせてみると、平均して、２コマ（90分×2）の書写実技を『国語』の授業の中で行っている。ちなみに本学でも書写の実技は、『国語』の中に２コマ設定されている。

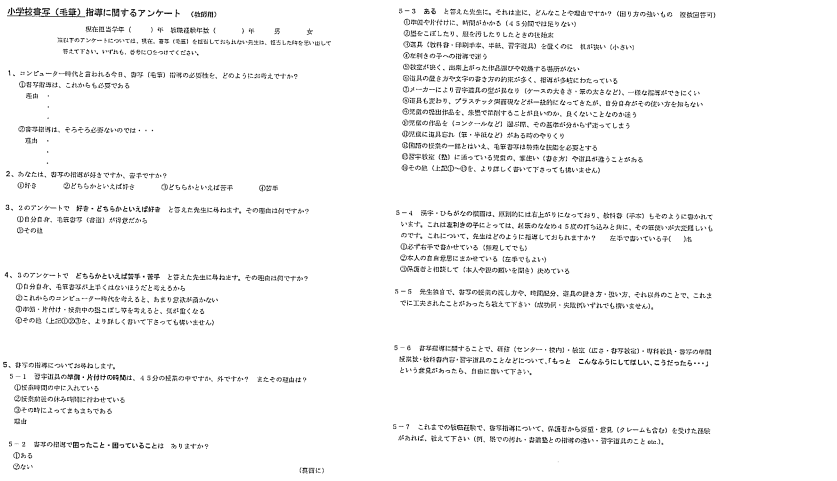
（4）現在わが国で使用されている小学校書写の教科書は、東京書籍・日本文教出版・学校図書・教育出版・三省堂・光村図書の６社である。

（５）実は、この論文を書き終える直前、「書写」を学校の研究テーマとして取り上げ、教職員一丸となって、実技研修及び指導法のあり方を研究している小学校を知った。愛知県西尾市津平小学校がそれである。ここでの研究は、テーマを「気付き、考え、行動する津平っ子の育成」副手題を、「言語活動を支える『津平の書写』の構築」とし、書写教育を単に書写の技術向上と考えず、あらゆる学習の基盤として位置づけているところに特徴がある。したがって、その指導について、たとえ教師が書写について得手不得手はあっても、担任が書写を指導することに意義があるというものであった。筆者も発表会当日（平成 24 年 10 月 29 日）、全学年の教室を参観させてもらった。授業への取組、授業内容。授業方法いずれも教師の書写に対する得手不得手に関係なく、一丸となった研究への取組は見事であった。今後の書写教育の在り方について、津平小学校が一石を投じたことは確かである（アンダーラインは筆者）。

・津平小学校『「津平の書写」ハンドブック』2012 年　西尾市立津平小学校

・津平小学校『気付き、考え、行動する津平っ子の育成・公開授業指導案集』2012 年　西尾市立津平小学校

（６）調査アンケート用紙（教師対象及び児童対象）



小学校書写（毛筆）指導に関するアンケート　（担任用）

現在担当学年（　　）年　担任経験年数（　　）年　　男　　女

当日までのアンケートについては、現在、書写（毛筆）を担当しておられない方は、感じたことを思い出して答えて下さい。いずれも、各々に○をつけてください。

1、コンピューター時代と言われる今日、書写（毛筆）指導の必要性を、どのようにお考えですか？
①書写教育は、これからも必要である
　理由　・
　　・
　　・
②書写教育は、そろそろ必要ないのでは・・・
　理由　・
　　・

2、あなたは、書写の指導が好きですか、苦手ですか？
①好き　②どちらかといえば好き　③どちらかといえば苦手　④苦手

3、２のアンケートで　好き・どちらかといえば好き　と答えた先生に与ねます。その理由は何ですか？
①自分自身、毛筆書写（書道）が得意だから
②その他

4、３のアンケートで　どちらかといえば苦手・苦手　と答えた先生に与ねます。その理由は何ですか？
①自分自身、毛筆書写が上手くはないほうだと考えるから
②これからのコンピューター時代を考えると、あまり意味が無いから
③申込・片付け・採点中の狭っ苦しい等を考えると、気が重くなる
④その他（上記①②③と、より詳しく書いて下さっても嬉しい限りです）

5、指導の指導についてお与ねします。
5－1　習字道具の準備・片付けの時間は、４５分の授業の中ですか、外ですか？　またその理由は？
①授業時間の中に入れている
②採点前迄の休み時間に行わせている
③その時によってまちまちである
理由

5－2　書写の指導で困ったこと・悩っていることは　ありますか？
①ある
②ない
（裏面に）

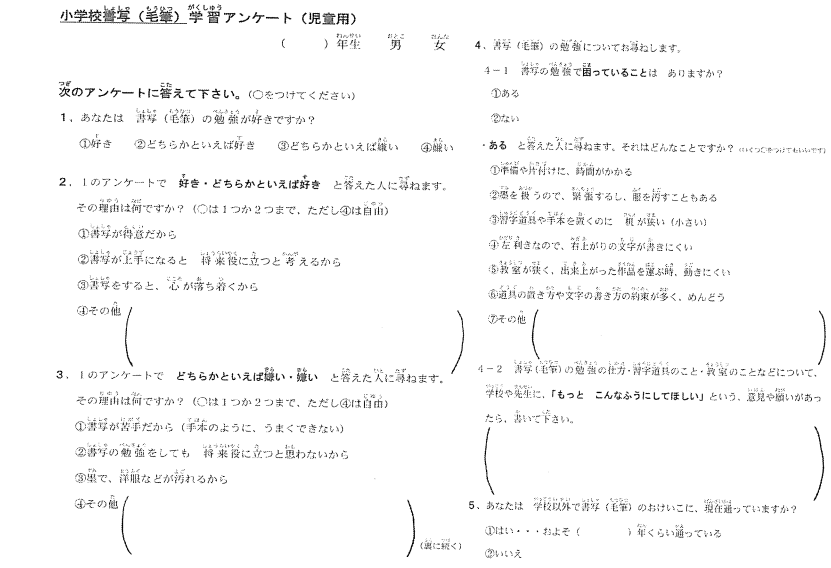
5－3　ある　と答えた先生に。それは主に、どんなことや理由ですか？（回り方の強いもの　複数回答可）
①申込や片付けに、時間がかかる（４５分間では足りない）
②墨をこぼしたり、服を汚したりしたときの比較度
③道具（敷物類・硯箱等を、半紙、習字道具）を揃えるのに　費が強い（小さい）
④左利きの子への指導で困る
⑤教室が狭く、出来上がった作品運びや乾燥する場所がない
⑥道具の扱き方や文字の書き方の約束が多く、指導が多岐にわたっている
⑦メーカーにより習字道具の型が異なり（ケースの大きさ・蓋の大きなど）、一様な指導ができにくい
⑧道具も更かり、プラスチック製硯箱などが一般的になってきたが、自分自身がその使い方を知らない
⑨児童の提出作品を、余裕で面倒することが出いのか、良くないことなのか迷う
⑩児童の作品を（コンクールなど）選ぶ際、その基準が分からず迷ってしまう
⑪児童に道具忘れ（墨・半紙など）がある時のやりくり
⑫保護の経費の一部とはいえ、毛筆書写は物価な指導を必要とする
⑬習字教室（塾）に通っている児童の、家庭い（自主学）や道具が違うことがある
⑭その他（上記①～⑬を、より詳しく書いて下さっても嬉しい限りです）

5－4　漢字・ひらがなの指導は、原則的には主上がりになっており、教科書（手本）もそのように書かれています。これは毛利生の手にとっては、起筆のなるべく４５度の打ち込みと共に、その収筆いが大変難しいものです。これについて、先生はどのように指導しておられますか？　左手で書いている子（　）も
①必ず右手で書かせている（指導してでも）
②本人の自由意思にまかせている（左手でもよい）
③保護者と相談して（本人や親の願いを聞き）決めている

5－5　先生独自で、書写の授業の流し方や、時間配分、道具の扱き方・扱い方、それ以外のことで、これまでに工夫されたことがあったら与えて下さい（成功例・失敗例いずれでも嬉しいです）。

5－6　書写指導に関することで、研修（センター・校内・独立（広さ・書写設定）・専科教員・書写の専門校長歴・教科書内容・習字道具のことなどについて、「もっと　こんなふうにしてほしい、こうだったら・・・」という意見があったら、自由に書いて下さい。

5－7　これまでの質問項目で、書写指導について、保護者から感想・意見（クレームも含む）を受けた経験があれば、与えて下さい（例、筆での汚れ・書道塾との指導の違い・習字道具のこと etc.）。



小学校書写（毛筆）学習アンケート（児童用）

（　　）年生　男　女

次のアンケートに答えて下さい。（○をつけてください）

1、あなたは　書写（毛筆）の勉強が好きですか？
①好き　②どちらかといえば好き　③どちらかといえば嫌い　④嫌い

2、１のアンケートで　好き・どちらかといえば好き　と答えた人に尋ねます。
その理由は何ですか？（○は１つか２つまで、ただし④は自由）
①書写が得意だから
②書写が上手になると　将来役に立つと考えるから
③書写をすると、心が落ち着くから
④その他（　　）

3、１のアンケートで　どちらかといえば嫌い・嫌い　と答えた人に尋ねます。
その理由は何ですか？（○は１つか２つまで、ただし④は自由）
①書写が苦手だから（手本のように、うまくできない）
②書写の勉強をしても　将来役に立つと思わないから
③墨で、洋服などが汚れるから
④その他（　　）
（裏に続く）

4、書写（毛筆）の勉強についてお尋ねします。
4－1　書写の勉強で困っていることは　ありますか？
①ある
②ない
・ある　と答えた人に尋ねます。それはどんなことですか？（いくつでも○をつけてもいいです）
①準備や片付けに、時間がかかる
②墨を汚すので、緊張するし、服を汚すこともある
③習字道具や手本を買うのに　費が嵩い（小さい）
④左利きなので、右上がりの文字が書きにくい
⑤教室が狭く、出来上がった作品を運ぶ時、動きにくい
⑥道具の扱き方や文字の書き方の約束が多く、めんどう
⑦その他（　　）

4－2　書写（毛筆）の勉強の仕方・習字道具のこと・教室のことなどについて、学校や先生に、「もっと　こんなふうにしてほしい」という、意見や願いがあったら、書いて下さい。
（　　）

5、あなたは　学校以外で書写（毛筆）のおけいこに、現在通っていますか？
①はい・・・およそ（　　）年くらい通っている
②いいえ

（７）和田圭壮　福岡教育大学紀要第 55 号、第５分冊『硬筆と毛筆を一体化させた書写授業の試み』、2006 年　p．17

（８）現在、『書写』の教科書会社６社中１社のみ、習字道具の置き場所について、「左手で、筆を持つ人は、机の

左に置いてもでもよい」とアドバイスが入っている。

（9）ここでの書写専科教員というのは、「書写」の授業のみを専門で行う教師ということで、教師同士の授業交換や、教務や教頭が、担任に代わり書写の授業に入ったりするケースは考えていない。

（10）ちなみに、毛筆習字を中国では「書法」と呼ぶ。また、その地から伝播し、わが国に『書』文化をもたらした韓国・朝鮮では「書芸」と呼んでいる。わが国では、芸術的及び精神的な向上をめざす意味合いを強く込めて「書道」、単に文字の形を学ぶことを「書写」、さらには、文字全般を学ぶことを含む意味合いを込めて「習字」と呼んでいる。このような細かいニュアンスを内包する呼称を持つ国は、他に見あたらないようである。

参考文献・図書

（1）青山浩之『「書く力」を育てる小学校国語書写の授業プラン』2012年　明治図書

（2）安達嶽南『書道科教育法』1968年　佛教大学出版部

（3）伊崎一夫・阿部秀高編著『移行期からはじめる新しい国語の授業づくり』2009年　日本標準

（4）魚住和晃『書を楽しもう』2002年　岩波書店

（5）江守賢治『字と書の歴史』1980年　日本習字普及協会

（6）上条信山『現代の書教育』1970年　木耳社

（7）清水雅滋『悪筆が三時間で直る本』2004年　木耳社

（8）関岡松頼『書写指導の手引き』2012年　木耳社

（9）續木湖山『書写の事典』1985年　全教図

（10）妻倉昌太郎『書道心理学』1989年　啓明出版株式会社

（11）西川寧『書の変相』1970年　二玄社

（12）服部北蓮『梧竹堂書話』1967年　日本習字普及協会

（13）春名好重『書道基本用語詞典』1991年　中教出版株式会社

（14）平嶋一臣『空海・風信帖精解』2012年　福岡の郷土誌・月刊『うわさ』連載

（15）平山観月『書道教育汎論』1970年　有朋堂

（16）福山秀直・青山浩之『脳トレ書道のススメ』2009年　二玄社

（17）依田新『教育心理学講座　第13巻　芸能科学習の心理』1954年　金子書房

（18）文部科学省『初等教育資料』2011年　東洋館出版社

（19）文部科学省『小学校学習指導要領解説・国語編』2008年　東洋館出版社

（20）津平小学校『「津平の書写」ハンドブック』2012年　西尾市立津平小学校

（21）時事通信社『教員養成セミナー』2011年5月号

（22）国語力向上モデル研究会編『ポイントと授業づくり・国語』2008年　東洋館出版社

（23）新しい国語教育を創造する会『小学校学習指導要領の展開・国語編』2008年　明治図書出版株式会社

（24）時事通信社『内外教育・第6071号』2011年4月5日号

（25）東京書籍『新しい書写』2010年

（26）日本文教出版『小学書写』2010年

（27）学校図書『みんなと学ぶ小学校書写』2010年

（28）教育出版『小学書写』2010年

（29）三省堂『小学生の書写』2010年

（30）光村図書『書写』2010年